

今週の為替相場見通し(2023年5月15日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		133.74 ~ 135.76	135.76	133.50 ~ 138.00
ユーロ	(ドル)		1.0848 ~ 1.1053	1.0849	1.0750 ~ 1.1100
(1ユーロ=)	(円)		146.15 ~ 149.25	147.29	145.00 ~ 149.00
英ポンド	(ドル)		1.2445 ~ 1.2679	1.2448	1.2300 ~ 1.2600
(1英ポンド=)	(円)	*	167.85 ~ 171.18	169.02	167.00 ~ 172.00
豪ドル	(ドル)		0.6637 ~ 0.6818	0.6642	0.6500 ~ 0.6800
(1豪ドル=)	(円)	*	89.80 ~ 91.88	90.15	88.00 ~ 92.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 山口 朋子

(1)今週の予想レンジ: 133.50 ~ 138.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

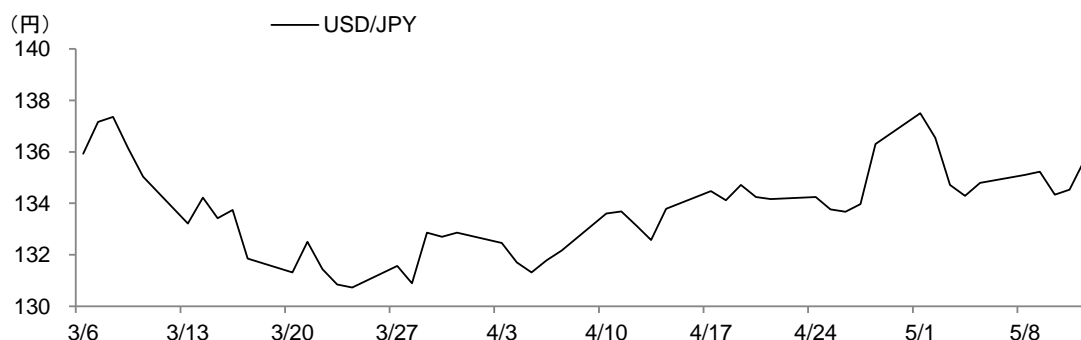
先週のドル/円相場は往って来いの展開。週初8日のドル/円は135.18円でオープン。この日はロンドン市場休場の中、ドル/円は動意に乏しい展開となった。米国時間に、米1~3月期上級融資担当者調査の結果が公表され、融資基準が予想されたほどは厳格化されていなかったことを背景に、米金利が上昇するとドル/円も底堅く推移。その後は米物価統計公表を控え、135円台前半で推移となった。10日に発表された米4月消費者物価指数(CPI)の結果が総合ベースで前年比+4.9%と市場予想の+5.0%を下回ると、米金利低下につられドル/円は134円台前半に急落。翌11日もドル売りの流れは継続し、ドル/円は133円台まで下落。海外時間には堅調な株式市場を背景に一時134円台後半に上昇するも、発表された米4月生産者物価指数(PPI)の鈍化を受けた米金利低下などを背景に一時週安値となる133.74円に反落した。ただし、12日に発表された米5月ミシガン大学消費者信頼感指数の5~10年先のインフレ期待が市場予想を上回る結果となると、再び米金利が上昇する展開にドル買い優勢となり、ドル/円は135.76円と週高値を付け、この水準で越週した。

今週のドル/円は底堅い展開を予想する。先週発表された米4月CPI、PPIが市場予想を下回ったことで一時FRBによる年内利下げ観測が高まった。ただし、カシユカリミネアポリス連銀総裁は「インフレは低下したが依然として目標を上回っている」とのタカ派発言、さらに米5月ミシガン大学消費者信頼感指数の結果を受け、6月の利上げの可能性が再び台頭している。今週はFRB高官や米地区連銀総裁らの発言が多く予定されており、年内の早期利下げを織り込む市場をけん制する等のタカ派発言が続くとドル買いの流れは継続すると予想。さらに今週発表される米経済指標で米経済の回復が確認されるとドル買いの支援材料となろう。また、本邦では1~3月期GDP速報値や4月全国CPIの発表が予定されており、こちらは市場予想を下回ると円売りが強まる。一方で米銀行破綻からの信用不安問題、さらに米債務上限の期限が迫っている中、リスク回避的な円買いが進む可能性もあり、ヘッドラインに警戒したい。今週の注目の経済指標は15日(月)米5月ニューヨーク連銀製造業景気指数、16日(火)米4月小売売上高、17日(水)日1~3月期GDP速報値と4月全国消費者物価指数を予定。

(3)先週までの相場の推移

先週(5/8~5/12)の値動き:

安値 133.74 円 高値 135.76 円 終値 135.76 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第一チーム 多川 昇吾

(1) 今週の予想レンジ: 1.0750 ~ 1.1100 145.00 ~ 149.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは、独金利低下を受け、最近のユーロ高を一部巻き戻す形で下落した。週初8日、1.1018でオープンしたユーロ/ドルは、ユーロ圏5月センチックス投資家信頼感の軟調な結果が嫌気され、ユーロが売られる中、1.10付近へ下落した。9日、ユーロ/ドルは、欧州銀行株が下落するなど投資家心理の悪化がユーロ売りに繋がり、1.09台半ばに続落した。10日、ユーロ/ドルは独金利低下に合わせ1.09台前半まで下押すも、NY時間には米4月CPIの結果を受けた米金利急落を受け、一時1.10台に乗せた。しかし長続きはせず、その後はドル売りの一服を背景に1.10を割り込んで引けた。11日、ユーロ/ドルは米地銀に対する懸念が再燃し、独金利が大きく低下する流れに一時週安値となる1.09ちょうどに下落した。12日、NY時間でボウマンFRB理事が、追加利上げの必要性についての見解を示したこともあり、米追加利上げの可能性が再燃。これを受けユーロ/ドルは1.09台を割り込み、1.08台後半まで下落し越週した。

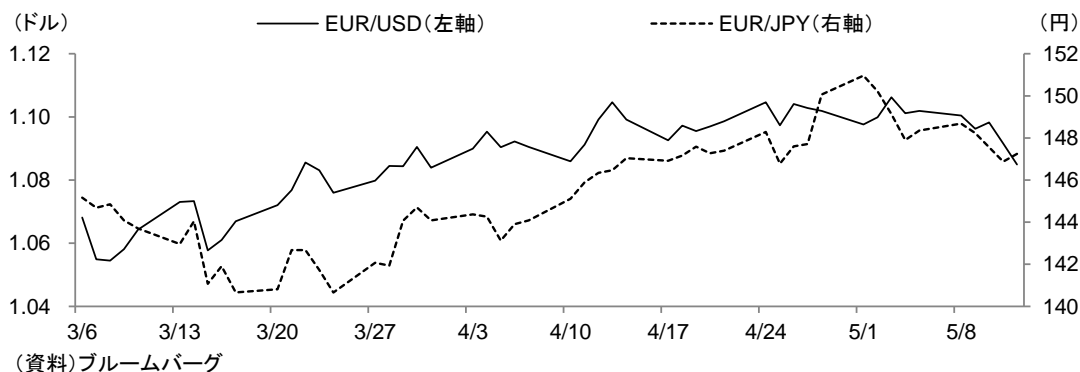
今週のユーロ相場は堅調推移を予想する。5月初週のFOMC以降、市場の主要テーマはFRBの利上げ停止のタイミングについて。先週発表された米4月CPI、米4月PPIは全体的に市場予想を下回り、米インフレ鈍化が確認される結果となった。これを受け、FRBによる利上げ停止の公算が高まってきた。一方でユーロ圏についてはユーロ圏4月CPI(速報値)にて前年比+0.1%と、依然高いインフレ水準にある。また、これについてECB高官からからも、利上げ継続の必要性を説く発言が相次ぐなど、ECBの利上げ継続の蓋然性が高まってきた。このことから、対ドルでのユーロ買い地合いはしばらく続くものと予想される。また、17日(水)にはユーロ圏4月CPI(確報値)の発表があり、インフレ率の鈍化がみられなければ、ECBによる更なる利上げ期待でユーロ買いが進む展開を見込む。来週はFed高官らの発言機会も多く、利上げ停止のみならず利下げ開始時期の早期化に関する言及もあれば、ユーロ/ドルには上昇圧力が強まりやすいだろう。週初にはブリュッセルでユーロ圏財務相会合も控えており、要人発言を受けて局所的にボラティリティが高まる状況には警戒しておきたい。他15日(月)ユーロ圏3月鉱工業生産、16日(火)ユーロ圏1~3月期GDP(速)、ユーロ圏5月ZEW景気期待指数、ユーロ圏3月貿易収支、19日(金)独4月PPIの発表を控える。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/8~5/12)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0848 高値 1.1053 終値 1.0849

(対円) 安値 146.15 高値 149.25 終値 147.29



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 將行

(1)今週の予想レンジ: 1.2300 ~ 1.2600 167.00 ~ 172.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場はその前の週からのドル安の流れを行きつづ形で上昇で始まり、10日には米CPI発表後のドル売りの流れを受けて対ドル1.2679の年初来高値水準まで上昇した。しかし、11日のイングランド銀行(BOE)の金融政策発表後は直後こそポンド高で反応したものの続かず、グローバルなドル反発に押される形でその後、ポンドは急速に下げ足を速めている。週間を通して見ればポンドは対ドルで下落しており、4月初旬以来の上値抵抗線となっていた1.25を再び割り込んでいる。BOEは11日の会合で、市場予想通り政策金利を+25bp引き上げ4.50%とした。決定は前回と同様に7対2で、テンレイロ、デイングラ両委員が据え置きを主張している。フォワードガイダンスは「物価圧力がさらに持続する証拠があれば、金融政策の一段の引き締めが必要になるだろう」と、3月会合時の文言を踏襲した。声明文や金融政策報告書の最大のハイライトはGDP見通しの上方修正であろう。BOEは英国経済がマイナス成長に陥るといふこれまでの見方を覆し、景気後退を回避するという見解を示した。BOEは新たな見通しにおいて、第1四半期と第2四半期の両方でそれぞれ前期比+0.2%の成長を予想している。BOEはインフレ見通しも上方修正しており、2023年末の見通しを年率+3.9%から年率+5.1%へと引き上げている。2023年の現在年率10%を超える消費者物価指数が、4月から急激に低下し始めるという見方に変わりが無いものの(前年比で見たCPIの計算上、ロシアによるウクライナ侵攻を受けた2022年4月のエネルギー価格急騰の影響が大幅に低下することになるため)、賃金とサービス価格の上方スパイラルや、食料品価格の想定以上の上昇によって広範な品目の価格が押し上げられる二次的波及リスクに対する警戒を示している。BOEのスタンスを一言で言い表すのであれば、「データ次第」であり、6月22日の次回会合で利上げを継続する可能性も、利上げを停止する可能性も共に残された形だ。ベイリーBOE総裁は、記者会見後に行われたブルームバーグによるインタビューで「金利水準については、ある意味で休止が可能になる地点に近づいている」とした一方、「だが、この見解に一段と強い論拠を与えるエビデンスはまだ出てきていない。」と発言している。

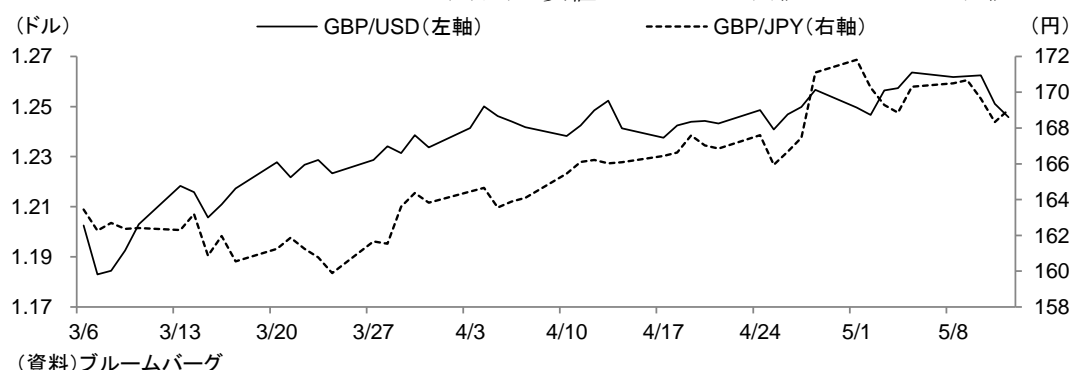
今週の英ポンド相場は上値が重くなりそうだ。先週に対ドル1.25の心理的節目を割り込んだことに伴い、当面、下落圧力が続く可能性は排除できないためだ。先週木曜日と金曜日に見られたドル急反発が何に起因するものなのかの解釈は難しいものの、米債務上限問題などを意識したリスク回避のドル買いという見方も根強い。こうした流れの中、BOEの「データ次第」というスタンスがハト派的だったと後付け的に解釈する向きもでてきている状況だ。もっとも、市場が織り込むBOEのターミナルレート(政策金利の到達地点)は5.0%手前で推移しており、BOEの金融政策見通しが大幅に変更を迫られた様子は見られない。米FRBが利上げ停止を示唆する一方と、BOE及びECBが利上げ継続の可能性を示唆しているというコントラストは今後も為替市場のメインテーマとなる公算が大きく、米債務上限などの材料をこなしながら中長期的にはポンド高方向の流れが継続すると見ている。来週発表される経済指標では、16日に公表される一連の労働市場関連統計が重要となる。インフレ高止まり懸念の中心にある労働需給ひっ迫、賃金上昇圧力に緩和の兆しが見られなければ、6月会合での追加利上げという見方が改めて強まるだろう。

(3)先週末までの相場の推移

先週(5/8~5/12)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2445 高値 1.2679 終値 1.2448

(対円) 安値 167.85 高値 171.18 終値 169.02



4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 山岸 寛昭

(1) 今週の予想レンジ: 0.6500 ~ 0.6800 88.00 ~ 92.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、週後半に下落する展開。週初8日の豪ドルは0.6750近辺から取引開始後、前週金曜日の流れから米ドル売り豪ドル買いが先行。豪4月NAB企業景況感は前月から2ポイント低下したものの依然底堅さを維持し、足許の堅調な需要と労働市場の状況を示した。ロンドン休場に加え主要指標発表が少ない中、豪ドルは欧米時間にかけてじわりと上昇。一時0.6803近辺を付けたのち小幅売り戻されて0.6780近辺で引けた。9日は0.6780から取引開始後、米債務上限問題を巡る協議が難航していることも重しとなり、欧米時間にかけて株価が下落幅を拡大。豪ドルも頭を押さえられて0.6760近辺まで下落して引けた。10日は米4月CPIが前年比で予想を下回ったことを受けて米ドル売りが強まると、豪ドルは急上昇して2月来高値0.6818を付けた。その後すぐに売り戻されて荒い値動きとなるも、再び買い戻されて0.6780近辺で引けた。11日は中国4月CPIがゼロ付近まで鈍化したほか、同PPIのマイナス幅が拡大したことから中国の需要回復懸念を背景に0.67台前半へ下落。NY時間には米地銀の経営不安が再燃し、リスク回避ムードで米ドル買い豪ドル売りが強まり0.67割れまで下落した。12日は特段材料なく、日中は0.67ちょうど近辺で一進一退の動き。海外時間は米5月フィッシャー大学消費者信頼感指数のインフレ期待が予想上回ったことで米ドル買いが強まり、豪ドルは週安値の0.6637まで下落し、0.6642で越週。

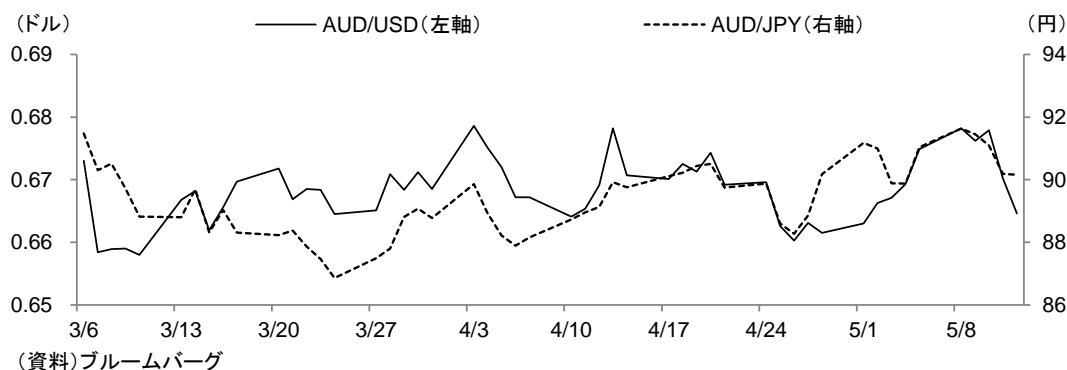
今週の豪ドル相場は、底堅い展開を予想。豪中銀RBAは今月2日の金融政策会合で、金利据え置き予想が多いなか利上げを実施。会合で発表された声明文では、豪州経済・物価の認識について「インフレはピークアウトしたものの極めて高い」「失業率が歴史的低水準にある状況を踏まえ、持続的高インフレ期待が物価と賃金の大幅上昇となるリスクを警戒」「インフレ率が目標に戻るにはさらに金融引き締めの可能性はあるが、それは景気動向・インフレ次第になろう」と説明。状況次第での今後の利上げの可能性に含みを持たせた。豪州の堅調な雇用・物価関連指標を踏まえると、現在ほとんど織り込まれていない追加利上げ観測が今後高まる過程で、豪ドルが上昇する展開を想定しておきたい。雇用者数の伸びについては、直近2か月連続で市場予想を上回り、3月分は前月比+5万3千人増と予想の+2万人を大幅超過する堅調な内容。失業率も約50年ぶり低水準となっており、労働市場はタイトな状況。賃金上昇でサービス価格を中心としたインフレ懸念根強く、RBAのインフレ率トリム平均予測は今年12月時点で4%と高止まりが見込まれており、RBAが追加利上げに踏み切る可能性はありそう。米国ではFRBの利上げ打ち止め観測が強まっており、豪米の金融政策格差も豪ドル相場のサポート材料になりそう。一方で、今月5日公表のRBA四半期報告では、昨年5月から計11回の利上げが経済に徐々に浸透するとの見方から、インフレ率・賃金上昇率・GDP伸び率見通しを引き下げている。引き締め方向に警戒しつつ、データ次第で金融政策が大きく変わる可能性も留意しておきたい。今後しばらくは、米地銀の経営不安や米債務上限問題によるリスク回避高まりも、豪ドルの下落リスクとして注意。今週の豪州の経済指標・イベントについては、16日(火)豪5月RBA議事要旨、17日(水)豪1～3月期賃金指数、18日(木)豪4月雇用統計が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/8～5/12)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6637 高値 0.6818 終値 0.6642

(対円) 安値 89.80 高値 91.88 終値 90.15



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。